

さちひろ

発行：天理教狭千廣分教会 〒589-0021 大阪狭山市今熊1-1133 Tel.072-365-2571

E-mail : wat@sachihiro.com url : http://sachihiro.com 編集兼発行人・山口 渡

天理教狭千廣分教会の広報紙

- 1面・四拍手の由来とその意味
- 2面・幸せを届ける言葉
- 3面・おやさま逸話篇から
- 4面・教会の動き・編集後記

教会の動き

- 朝づとめ：毎朝・6時30分
- 夕づとめ：毎夕・7時00分
- 春季大祭：1月21日午後1時30分
- 秋季大祭：10月21日午後1時30分
- 月次祭：毎月21日 午後1時30分
- 春・秋季霊祭：3月22日・9月22日 午後1時30分

※教会の場所は、左の地図の🌸マーク。市立公民館の裏・西側です。



■「第一回狭山躍進の集い」開催
さる10月28日(日)に、開催されました。参加者、約三〇〇名でした。

午前十時より、おつとめまなびを十四交替でつとめました。そのあと、田中善太郎・中河・前大教会長様の講話をいただき、その後には弁当などが配布され、狭山鼓笛隊の演奏、ハーブとフルートの華麗な演奏、そして最後に、大抽選会とで大いに盛り上がりました。

編集後記

▼先月から今月のはじめにかけて、いろいろと行事が目白押しで、結局本紙の編集もままならず、一月遅れになってしまいました。

▼上記「狭山役員集い」につづいて、十一月五日には、恒例になりました阪南支部第五組の第23回おつとめ総会が開催されました。大阪狭山市内のよふばくの方々を中心に、おつとめまなびをつとめ、特注のお弁当、特製のお吸い物とぜんざいをいただき、無事閉幕しました。

▼今月から、阪南支部でも天理時報の手配りが始まりました。

▼わがホームページのブログの方もご覧ください。 [#やまやんのブログ](http://sachihiro.com) からお入りください。

さちひろ 第21号

編集兼発行人・山口 渡

平成19年11月21日

大阪狭山市今熊1丁目1133番地

Tel. 072-36512571



四拍手の由来とその意味

天理教の参拝は、四拍手が基本ですが、それはどこに由来するのでしょうか？

手もそれを踏まえているのでしょうか？

『稿本天理教教祖伝』や『稿本天理教教祖伝逸話篇』に拍手について記されているか、調べました。

「お帰りの時には、信者の人々が多数、お迎えに押し寄せたので、監獄署の門前は一面の人で、午前十時、教祖が門から出て来られると、信者達はパチ／＼と拍手を打って拝んだ。」(『稿本天理教教祖伝』第九章)

「明治十七年頃の話。教祖が、監獄署からお出ましの日が分かって来ると、監獄署の門前には、早くから、人が一杯になって待っている。そして、「拝んだら、いかん。」と言うて、巡査が止めに廻わっても、一寸でも教祖のお姿が見えると、パチパチと拍手を打って拝んだ。」(『稿本天理教教祖伝逸話篇』一五三 お出ましの日)

わずかに、この二件です。両方とも、教祖を神様として拝をする一般の人々が、「パチパチと拍手を打って拝んだ」とあって、二拍手で拝していたと推測できます。

また『稿本天理教中山真之亮伝』に、教祖五年祭の式次第が掲載されています。そこに「二拝短手」「四拝八平手」という文字が見えます。

一般に、日本の伝統的な参拝の作法(神道)では、「二礼二拍手一礼」だそうです。と言っても、今はそれさえも心得ない人が大多数かも知れません。二礼二拍手一礼に統一されたのは明治維新の神仏分離によるもので、それ以前は、各神社まじまじの参拝の仕方があったようです。

現在でも出雲大社では、四拍手が使われています。その説によると、神に対し四拜または四拍手することは、日本古来の一般の風習で、当時の書物にその由が記されているとか。(たとえば、『儀式』巻三踐祚大嘗祭儀に、「跪いて手を拍つこと」などがあります)

その意味では、出雲大社の四拍手は、旧儀を忠実に伝えているとも言えるかも知れません。天理教の四拍

* * *

天理教では、神前で「四拍手一礼四拍手」という形で参拝します。当たり前すぎて説明など必要ないと思うのですが、先日、その点を原稿に認めるよう求められ、改めてその意味と歴史的な背景を調べました。そうすると、意外とわからないことが多すぎて、かえって新鮮な気分になった次第です。そこで、以下にその消息をまとめました。本紙巻頭にはいささか似合わないかも知れませんが、ご一読を乞います。

* * *

「二礼二拍手一礼」だそうです。と言っても、今はそれさえも心得ない人が大多数かも知れません。二礼二拍手一礼に統一されたのは明治維新の神仏分離によるもので、それ以前は、各神社まじまじの参拝の仕方があったようです。

現在でも出雲大社では、四拍手が使われています。その説によると、神に対し四拜または四拍手することは、日本古来の一般の風習で、当時の書物にその由が記されているとか。(たとえば、『儀式』巻三踐祚大嘗祭儀に、「跪いて手を拍つこと」などがあります)

その意味では、出雲大社の四拍手は、旧儀を忠実に伝えているとも言えるかも知れません。天理教の四拍

現在でも出雲大社では、四拍手が使われています。その説によると、神に対し四拜または四拍手することは、日本古来の一般の風習で、当時の書物にその由が記されているとか。(たとえば、『儀式』巻三踐祚大嘗祭儀に、「跪いて手を拍つこと」などがあります)

その意味では、出雲大社の四拍手は、旧儀を忠実に伝えているとも言えるかも知れません。天理教の四拍

現在でも出雲大社では、四拍手が使われています。その説によると、神に対し四拜または四拍手することは、日本古来の一般の風習で、当時の書物にその由が記されているとか。(たとえば、『儀式』巻三踐祚大嘗祭儀に、「跪いて手を拍つこと」などがあります)

その意味では、出雲大社の四拍手は、旧儀を忠実に伝えているとも言えるかも知れません。天理教の四拍

現在でも出雲大社では、四拍手が使われています。その説によると、神に対し四拜または四拍手することは、日本古来の一般の風習で、当時の書物にその由が記されているとか。(たとえば、『儀式』巻三踐祚大嘗祭儀に、「跪いて手を拍つこと」などがあります)

その意味では、出雲大社の四拍手は、旧儀を忠実に伝えているとも言えるかも知れません。天理教の四拍

現在でも出雲大社では、四拍手が使われています。その説によると、神に対し四拜または四拍手することは、日本古来の一般の風習で、当時の書物にその由が記されているとか。(たとえば、『儀式』巻三踐祚大嘗祭儀に、「跪いて手を拍つこと」などがあります)

拍手打ち方には、古来いくつかの種類があります。三回以下のものは「短拍手（みじかて）」と呼ばれるそうです。出雲大社、宇佐八幡の四回、伊勢神宮の八回など、四回以上手を打つものは「長拍手（ながて）」と呼ばれます。その他に、八回打った後に再度短拍手を一回打つものを「八開手（やひらて）」というようです。上記の「四拍八平手」はそのような打ち方だったのでしよう。また神葬祭で音を出さずに打つ「忍手（しのびて）」などもあるとのこと。しかし、教祖五年祭の折のこの式自体、神道の様式に則って行われたものですから、天理教の色合いはほとんどないと言ってよいでしょう。ところで神道で、直会で盃を受けるときに一回打つ「礼手（らいしゅ）」というものがあります。二拍手の省略形でしょうか。

天理教の人は、食事の前に二拍手するのは、礼手のように、四拍手の省略形なのでしょう。

革新の時代（戦前）に、「天理王命」という神名の使用が政府から禁止された時代に、みかぐらうたの神名の部分

幸せを届ける言葉

高橋美津志「ちよつとひとこと」

（善本社刊）から

喜びは悲しみを消す

人はみな、誰でもうれしいときや、悲しいときがある。うれしいことがたとえ小さくとも大きく喜び、周囲に大いに語れ。逆に、辛いこと、悲しいことの泣き言は、ひそかに、トイレの中で小さい声でこぼせ。

大は小を消すように、やがて、喜ぶ明るさが、悲しみの暗さを消して、明るい人間を作る。いまさら言うまでもない。明るい人間に、幸福が宿り、くだらない人間に、不幸が住む。

を二拍手で代替したように、神名を念じる代わりに二拍手を打つようになったのでしょうか。

おさづけ取り次ぎの時も二拍手です。同じ経緯があるのかも知れません。などなど詳細不明です。

先人の方は、四拍手の教理的な意義を「幸せの（しあわせ・四つを合わせる）誓い」と説明されています。

人間を創造され化育されている元の神・実の神である親神様は、いつも人間が幸せをなすようお働きになっていきますから、病気を治して下さいとか、幸せにしてくださいなど念じる必要はなく、お願いをするのではなく、その日の誓いを申し上げるのです。

四つを合わせる誓い、（1）天の理に心を合わせる、（2）親に心を合わせる、（3）妻や夫（二人相互）に心を合わせる、（4）子供に、人に、周囲に心を合わせる、この四つに心を合わせる誓いが、四拍手だということです。語呂合わせのようですが、的を射た説明だと思いませんか。

言葉一つ

『稿本天理教祖伝逸話篇』137

教祖が、榊井伊三郎にお聞かせ下されたのに、

「内で良くて外で悪い人もあり、内で悪く外で良い人もあるが、腹を立てる、気候癩癩は悪い。言葉一つが肝心。吐く息引く息一つの加減で内々治まる。」

と。又、

「伊三郎さん、あんたは、外ではなかなかやさしい人付き合いの良い人であるが、我が家にかえって、女房の顔を見てガミガミ腹を立てて叱ることは、これは一番いかんことやで。それだけは、今後決してせんように。」と、仰せになった。

榊井は、女房が告口をしたのかしら、と思つたが、いやいや神様は見抜き見通しであらせられる、と思ひ返して、今後は一切腹を立てません、と心を定めた。すると、不思議にも、家へかえつて女房に何を言われても、一寸も腹が立たぬようになった。

■わたしたちのくらしの中で大事なものは、「日々」と「内々」です。毎日の積み重ねが暮らしを支えます。そして最も身近な「内」すなわち家族との関わりです。とくに言葉が重要だと思えます。言葉は人との交わりの、行為のはじまり。言葉の使い方には、よくよく心がけねばなりません。とくに家族、さらに夫婦間の言葉の交わりの大切さをこのお話は語っています。

■「言葉たんのうは道の肥、満足は道の肥、満足は八方広がる理である」と教えられます。また一方、不足の言葉は出さんよう、我が身の不足を言っていては人だすけはできません。不足の言葉は「臭い息」のようなもので、腐る心から出て、人の心を腐らせます。同じ口から出される息であっても、吹き方、その状況によつて、暖い息にもなり、冷たい風にもなります。親の息で子は育ち、親の風で子が死ぬ、と言います。

おやさまは「切り口上、捨て言葉、

あいそつかしはせぬように」と仰しやいました。口に出して言つたら言つたその者が、言つたようになるのです。

また、人の悪口いわんよう、陰口つげ口はせぬよう、人を悪くいわんよう、人をくささんよう、そりり笑いはしないよう心がけましょう。

■「声」は「肥」です。言葉のかけよう一つで肥にもなるし、また害にもなるものです。せつかくかける以上は肥として効くよう、よい声をかけさせてもらいましょう。

■口は噛み分けと吹き分けをします。食物は身の養い、言葉話は心の養いとなると思案して、真実の話はしっかり聞き、そして真実の話をさせてもらわばなりません。人の言うことは聞きよ一つです。人に耳を貸す、よう聞かせてくれた、よう聞いてくれた、これが大事ですね。わたしの口からは、いい言葉を出し、人の口から出る言葉は、聞きにくい言葉でも、息を吸うように耳を傾け心に治めましょう。